発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町2
電話(53)3033 (53)3034番
編集兼発行人　前川哲也
半年間1,200円　送料共

県政革新へ

大企業本位を許すな

全推薦候補の当選期そう

県知事選挙に続き、三月二十七日こんどは県議会議員選挙がスタート。福岡県で浦川守候補が、熊本県で酒井善為候補が、ともにひき続き議席を確保し、大企業本位の県政を許さず、それぞれ働く住民の手に奪還、革新県政への前進を期し出馬した。

先に開始した県知事選挙にひき続き、三月二十七日の告示をもって県議会議員選挙がスタートした。三池労組が推薦する浦川守候補が福岡県で、酒井善為候補が熊本県ですでに出馬、ひき続き議席を確保するために奮闘している。

やがて地方自治体の首長と議員の選挙へと、統一地方選挙は日ましに重大性を加えていくが、このなかで組合推薦各候補の当選は、石炭産業をめぐるきわめて特殊な情勢からもきわめて重大で、したがって組合員・家族の奮起が強く求められている。

福岡県政の現状

述べるまでもなく現在の県政はほとんど保守・自民党の手ににぎられ、大企業奉仕・反動的な中央集権を強化する方向で進められている。

なかでも炭鉱労働者にとっては重大で、政府・自民党が強力に進めてきた石炭政策は、世界的エネルギー情勢からすれば、今後きわめて重視しなければならない石炭産業をぶっつぶし、とくに産炭地――福岡県の場合三池炭鉱を除くほかの炭鉱を閉山に追いこんだ。そのため筑豊の苦しみは、その環境のなかで発生し続ける数々の悲劇とともに世に広く知られている。

もともと長く続いてきた亀井県政は、文字通り地域住民無視・大企業一辺倒で、そのため働く県民をわが国でも最低に近い状態に追いこんだ。

その社会的責任の追及を怠たることで、野放図な大企業の首切り合理化を免罪し、首切っては無権利状態の下請工をふやす。（現に、つい先ごろ首切った労働者に「働く気持はないか」との誘いの手紙を出している三池製煉などよい例）零細企業労働者やパート、臨時工・日雇の拡大。生活保護家庭数は、福岡県の場合千世帯中五十九世帯も。こんな例はどこにも見られない。

失業率は、百万都市を二つもかかえながら、福岡県は全国で第五位。しかもここには、わが国を代表するほどの大企業が活動しているというのに、県政の奉仕によって右の低賃金構造は今後さらに強まることは確かだ。

また亀井県政は労働運動（とくに県職）に抑圧を加え、反動教育を強制し、地方自治の中央集権体制の強化に手を貸している。

〝県民のくらしを守る革新県政をつくる会〟（福岡市博多区綱場町八―三一、福岡フィルムビル）が発行した、「くらしに直結した県政を」と呼びかけたビラは、続けて訴えている――「県民の立場にたって、保守県政のあやまったやり方をあらため、県民のくらしを守る、参加と連帯の県政をみんなでつくりましょう」と。

（五面記事参照のこと）

裁判公判日程

▼まず九・二八坑内火災裁判の公判が、四月二十六日福岡地裁で開廷します。

前回の公判にひき続いて、吉田磯彦・曙病院院長が証言することになっています。もちろん主尋問です。

なお大災害裁判と上村裁判（この方は〝判決〟）の公判につきましては、事情もございますため後でくわしくお伝えすることにしています。

死亡災害が相次ぐ

合理化しめつけのなか

会社が押しつける合理化のため、職場へのしめつけが加わるなか重大災害が続発。つぎつぎに坑内労働者の命を奪っている。

三月にはいってから、三川鉱の坑底で払採炭員の堤政義さんが命を奪われたばかりだというのに、ひき続き十六日有明鉱（北村剛造鉱長）で掘進員の森田和夫さん（二十五歳。大牟田市臼井社宅七十二棟）が、さらに二十六日こんどは四山鉱（木村治鉱長）で次席係員の吉田信夫さん（三十七歳。大牟田市小川町社宅二十三棟）が相次いで命を奪われた。森田さんは頭蓋骨折が、吉田さんの場合は頭蓋および両側骨折、肋骨骨折がともに致命傷となったもので、特に吉田さんの命を奪った災害は、別に払採炭員の秋山通昌さん（四十七歳）に重傷を負わせている。

これで今年三人のかけがえのない犠牲者を出したことになるが、まさにこれは、依然として労働者の命などかえり見ることなく、ただ利潤の増大・資本蓄積にだけ目を奪われながら強化されていく合理化が犠牲にしたものだということは疑うことができず、三池労組はいずれの場合も組合員全員ストライキをうって抗議した。（五面記事参照のこと）

故・宮川さんをしのぶ

しのばせた生前の遺徳

海外からまで死惜む弔電

3月25日組合葬

故人のおもかげ

さきに、大木が崩れるように他界した故宮川睦男・元組合長の三池労組葬が営まれるや、国内はもちろん海外諸国の労働組織からさえ弔電が寄せられ、三池は深い悲しみに沈んだ。

長い病気の末、宮川睦男・元組合長は他界した。三川十七日、入院先の三宅内科病院での永眠で、訃報は国境を突き抜け海外諸国にまで広がり、故人の死を惜しむ人びとの声が三池を包んだ。

三池労組は宮川・元組合長生前の遺徳を偲び、三月二十五日荒尾市公会堂で、悲しみのうちに三池労組葬を営み、冥福を祈った。

その日は三池労組員とその家族はもちろん、総評や炭労をはじめとする各級のあらゆる労働組織、社会党、共産党、各議会議員、社青同や労大にまなぶ友の会組織、婦人団体、CO遺族守る会や被災者団体、関東・関西両不知火会や三池退職者の組織――などの諸団体の代表や個人が各地からかけつけ、千人を越える人びとが思いをこめて香を焚き別れを惜しんだ。

飛鳥田一雄社会党委員長や横枝元文総評議長、森田久雄炭労委員長、向坂逸郎元九大教授、岩井章元総評事務局長に渋田紀生三池労組組合長、島文枝三池主婦会長らから弔辞がささげられ、百七十六通にものぼる弔電が寄せられた。弔電には、海外からの十通が含まれていて、宮川家に寄せられた分（二百九十一通）を合せると、四百六十七通。つづく、故人生前の遺徳を偲ばせた。

「歴史の証人なのだから、もっと長く生きていて欲しかった」（三池闘争時の炭労書記一同の弔辞）ものの、も早や「不退の楽土に至る」宮川元組合長。でもその魂はきっと今後永く、働く者の胸のなかに生き続けていくことだろう。（関連記事は二面に）

献げられた美しい花に包まれ、坑内帽を形どつた祭壇に、遺骨は安らかに在つた。

再び狂乱物価の危険

春闘準備は大丈夫か？

春闘をめざして立ちあがっている労働者に、まるでツバをひっかけるもののようにしながら、インフレは不安なその足どりを明らかに強めている。わが国の財界を代表する経済同友会さえ、「最近の物価上昇はすでに危険水域に入っている」（佐々木直代表幹事の談話）と懸念しているという。

〈連合通信〉記事（三月二十四日発行）に、二月の卸物価指数が年率に直すと前月比一一・四％大幅に二ケタも上昇したと。円安傾向や景気回復にともなう製品値上げ上昇から見て、卸売物価の上昇はなお続くと見通している。

それに地価も宅地価格が上昇を続けており、政府がゴリ押しにすすめる公共料金の値上げが目白押しに待ちかまえている。四月からの授業料にひき続いて、五月からは国鉄料金が普通運賃一二％、通学定期三六・九％という大幅な値上げだ。さらにタバコもハイライト百五十円、セブンスターが百八十円に。そのほかガソリン税の増税、健保改悪による患者負担の増大などがあり、独占の手にかき集められたダブツキ資金とともに、通貨の増大は、あの狂乱物価時代の様子に似てきたとは〈連合〉記事の警告だ。

×

これに対して、春闘といっても労働者の組織のある一部では、要求そのものを手ぴかえた傾向を強く見せていて、だれの口をついて出る言葉も――「今年の春闘はどうももりあがらん」だ。

物価危機必至の情勢を目の前にして、そんなことでよいか。

今後も天皇中心で……

西日本経済同友会

連合通信記事（三月十五日発行）によると、元号法制化が大きな問題になっているおり、第三十六回西日本経済同友会大会で、「天皇の役割は二十一世紀の日本の基本的条件」と位置づけた研究報告が行われた事実が明らかになったという。

大会は昨年十一月京都で開かれ報告は、皇室を中心とする歴史と伝統は過去のものではなく、後世に伝えることこそ自由社会を守るための基本であると結論、皇位継承がスムーズに運ばれるような国民意識の形成に留意しなければならない、と主張していると。